

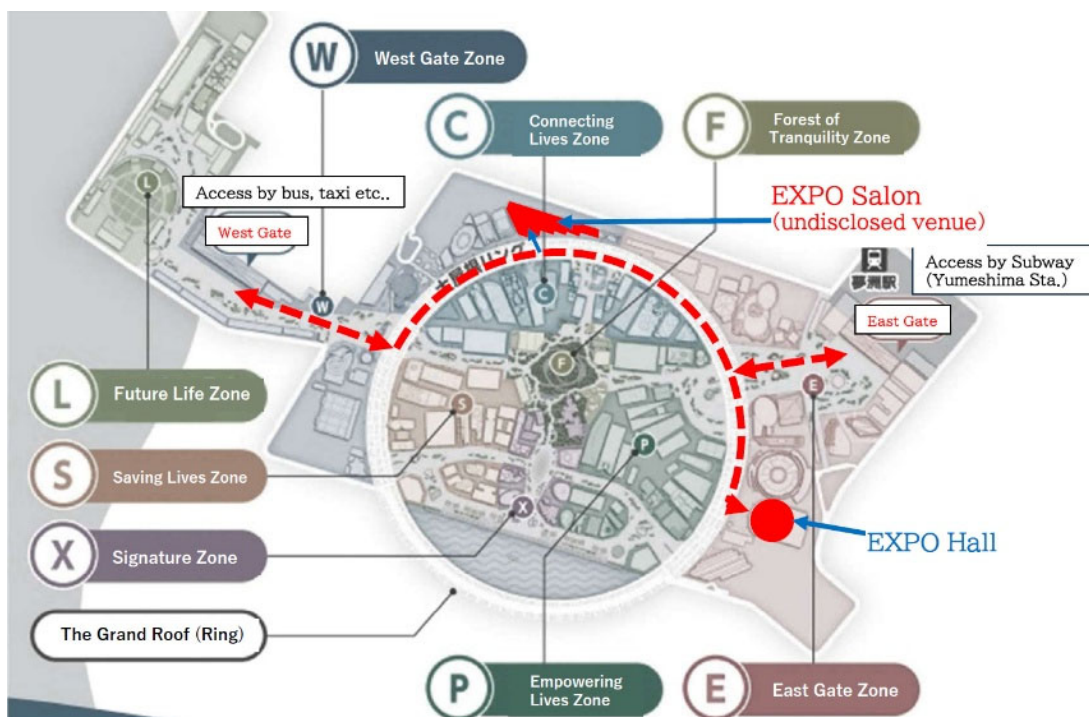
ひと夏の思い出in EXPO

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

この記事が六甲展望に掲載される頃には、関西万博もすでに終了していることだろう。本稿を執筆している8月時点でチケット販売による万博の収支バランスが取れそうだとの記事が新聞に掲載されていた。まずもって結構なことであるが、筆者はそもそも万博開催には反対であった。EXPO'70の再来を狙って大阪に人を集め、関西経済の復興を図ろうなどという魂胆が見えるようで嫌だった。関西経済の落ち込みはインバウンドでも万博でも解消しない。日本全体の視点で大阪の位置づけを再検討しなければならないと思うからである。

したがって筆者は当初から万博には行くつもりなどなかったが、図らずも行くはめになってしまった。というのは昨年インテックス大阪で開催された「向殿安全賞」の授与式から始まる。その場でENETOSH (European Network Education and Training in Occupational Safety and Health) の運営委員の一人であるUlrike Bollmann博士に紹介され、彼女から万博協賛事業GISHW-2025 (Global Initiative for Safety, Health & Well-being) の枠組みのなかの一つとして国際シンポジウムGlobal Crises, Youth and Education: Innovative Approaches to Risk, Resilience and Resonanceにおける講演を依頼されたのである。開催はEXPOサロンにて2025年7月19日(土) 16:00~18:00であった。

件の顛末については最後に述べるとし、今回の主題は8月13日21時半頃に発生した大阪メトロ中央線全線運転停止に伴うトラブルである。地下鉄停止の原因は送電用レールでの停電であったようだ。停止した時点で約38,000人が万博会場および周辺にいたとされている。会場のある夢洲へのアクセスは地下鉄と道路橋が各1本ある。地下鉄が使用不可となれば残るは道路橋のみになる。22時過ぎには夢洲駅とコスモスクエア駅間の折り返し運転を再開したが、万博事務局は夢洲駅への殺到を避けるために情報は流さなかったという。一方道路の方はシャトルバスなどによって最寄り駅などに



(講演会場EXPOサロンを見つけるのに大変苦労した)

滞留者を運べばいいが、バス台数や運転士確保などの制限であまり期待できず、結果的に多くの帰宅困難者が発生し、一部の開放されたパビリオンや屋外で一夜を過ごさざるをえなくなったのである。協会が危機対応を取ると決断したのはかなり遅く、滞留者に水などが配布されたのは14日の午前4時ごろだったという。協会側は記者会見で大過なく終結したが情報の出し方については検証する必要があると述べていたが、本当にそうなのだろうか。

そもそも協会側は多数の滞留者が出ることなど想定していなかったのだろう。本気で救出しようというのなら船舶も利用できたはずである。事前に緊急時には帰宅困難者の受け入れをすべてのパビリオンに依頼しておく、それを条件にパビリオンを建設許可するといった対応も取られていなかったと思える。仮設の半年間の行事だから本格的な災害対応をとる必要もないとしていたのではないか。巻き込まれた方々にとっては、ひと夏の思い出というにはあまりに残念な混乱であった。

さて件のシンポジウムは19日の最終時間帯に開催され、一つ前のセッションでは100人程度の参加者があったが、筆者のセッションになると6〜7名にまで減っていた。ちなみに会場スタッフ7〜8名、司会、講演者合わせて6名という陣容であった。シンポジウム終了後、司会と講演者の全員で打ち上げを行った際、40数年前の夏、米国ニューポートで開催された国際シンポジウムのことを話した。その折、筆者は最終日の最終セッションで講演したが、司会者1名、スライド係1名、照明係1名、講演者3名、そして聴講者は1名という会場であった。本日のセッションでは会場スタッフが講演者数の倍ほどいたわけで、全体で米国での経験をはるかに凌駕する約20名というとても賑やかなセッションであったと述べた。大うけしたのはもちろんである。